

平昌2018パラリンピック大会の放送に対する 健常者の視聴意識

—日本財団パラリンピックサポートセンター・ NHK放送文化研究所共同研究「パラリンピック と放送に関する研究」の二次分析から—

中山健二郎

(沖縄大学)

1. 緒言

近年、日本国内においてパラリンピックに関するメディア報道が増加傾向にある。「パラリンピック」という語が見出しに使用された新聞記事数の推移を分析した山崎・石井(2019)¹は、パラリンピックに関する新聞報道が1990年代後半から顕著に増加してきていることを示し、長野1998パラリンピック冬季競技大会が、国内のパラリンピックに関する新聞報道増加のきっかけとなったことを指摘している。また、ヤマハ発動機スポーツ振興財団が行った調査(2017, 2018)では、北京2008パラリンピック競技大会からリオ2016パラリンピック競技大会にかけて、テレビ報道量が4倍程度増加していること²、2013年に東京2020パラリンピック競技大会(以下「東京パラ大会」と略す)の開催が決定して以降、パラアスリート^{注1}のテレビコマーシャル出演本数も増加してきていること³などが報告されている。このような歴史的な報道量の増加と、東京パラ大会を契機とした注目度の高まりをみれば、今日、パラリンピックに関する報道は、一つの隆盛期を迎えていると捉えることができよう。

メディアスポーツ研究の系譜を包括的に検討した橋本(2002)は、メディア報道のスポーツへの作用として「スポーツの理解の仕方については一定程度マスメディアの影響力を認めざるを得ない」⁴と論じている。この指摘に鑑みれば、日本国内におけるパラリンピック報道の活況は、人々のパラスポーツに対する理解の仕方にも少なからず影響を与えているものと思われる。また、メディアを通じてパラアスリートのパフォーマンスが広く社会に伝えられることは、単にパラスポーツそのものに関する理解の仕方だけでなく、障がい者や障がいに関する理解の仕方にも作用する可能性がある。国際パラリン

ピック委員会が「パラスポーツを通じて障害のある人々にとってインクルーシブな社会を創出する」ことをパラリンピック・ムーブメントの目標（Aspiration）として掲げている⁵ことを踏まえれば、パラリンピックのメディア報道が、人々のパラスポーツに対する理解の仕方、および障がい者や障がいに関する理解の仕方によどのような影響を与えるのかについて検討することは、重要な研究課題であるといえる。

パラリンピックやパラスポーツのメディア報道が、人々に何を伝えており、どのような作用を持ちうるのかについては、これまで主に新聞記事やテレビ放送のテーマや内容といった、いわゆるメディア・テキストを対象に分析を試みた諸研究（藤田, 2002⁶；渡, 2007⁷；崎田, 2015⁸；遠藤, 2017⁹；田中, 2017¹⁰, 渡辺・中村, 2017¹¹など）によって検討されてきた。例えば、崎田（2015）は、東京1964パラリンピック大会に関するテレビ放送について、「障害者スポーツに特有の身体性および競技性を視覚化させることを指向しつつも、日本における障害者の社会復帰という課題を見据えて編集」¹²されていたと論じ、メディアの編集に社会課題への作用を意図する構成がみられたことを示している。また、田中（2017）¹³は、テレビを中心としたメディアにおけるパラスポーツの扱い方に関する歴史的変遷について分析し、そこにみられるパラスポーツに対する眼差しの変化を読み解いている。田中によれば、パラスポーツの報道に関する目線は「かわいそうという存在の障害者」から「障害があるのにすごいという感覚」、さらには「障害者が非日常的な存在ではなく、日常的な存在としてそこにいること」へと段階的に変化してきているという。また、渡辺・中村（2017）¹⁴は、パラリンピックの放送が「共生社会」の進展にいかに関与するのかという観点から、リオ2016パラリンピック競技大会における日英の放送に関する分析を行っている。分析を通じて、パラリンピックをオリンピックと同じように「スポーツ」として扱うことや、その中で、視聴者に障がいに関する問題を考えるきっかけを与えることなどにより、社会の意識変革に関与する可能性を論じている。

上述した諸研究は、パラリンピックやパラスポーツの報道が伝える価値や社会課題に対する作用を、それぞれの時代背景を踏まえて提示している点で大変示唆的である。しかしながら、メディアがどのような内容で報道していたとしても、その受け手である視聴者が報道をどのように解釈しているのかを検討しなければ、メディアの作用を具体的に読み解くには至らないという課題も残る。メディアを通じて、パラリンピックはどれだけの人々に、どのような目線でみられているのかについて、受け手を対象とした分析によって検討していくことが求められよう。また、社会変革に関与するイベントとしてパラリンピックを位置づけ、その作用を検討するためには、受け手の報道に対する捉え方のみならず、どのような意識の変化がもたらされているのかを分析していく必要が

ある。

以上のような、パラリンピック報道に関する受け手の解釈や意識の変化についての実証的検討という課題を念頭に、日本財団パラリンピックサポートセンターはNHK放送文化研究所と共同で、平昌2018パラリンピック冬季競技大会（以下「平昌パラ大会」と略す）のテレビ放送視聴者（障がい当事者および健常者）の視聴状況や視聴意識を把握するための調査¹⁵を行った。当該調査の結果については、これまで、日本財団パラリンピックサポートセンターおよびNHK放送文化研究所が双方の観点から、特に障がい当事者がパラリンピック放送をどのように捉えているのかに着目した分析を行っている（山田・大野，2018¹⁶；中山，2018a¹⁷；中山，2018b¹⁸）。山田・大野（2018）¹⁹は、身体障がい者の視聴意識に着目し、パラリンピックの視聴が前向きな気分の醸成や障がい受容にポジティブに作用したといえる視聴者がいた一方で、アスリートとの間にギャップを感じる視聴者もいたことなど、個人によって多様な捉え方がみられたことを示している。また、聴覚障がい者や高齢者などがパラリンピックの視聴をより楽しむためのアプローチとして、ユニバーサル放送（「解説放送」「字幕放送」「手話放送」など）の可能性にも言及している。また、中山（2018a²⁰，2018b²¹）は、特に視覚障がい者、聴覚障がい者がパラリンピックを積極的に視聴し、好意的に解釈していると思われる反面、知的障がい者、精神障がい者、発達障がい者に関しては、相対的に関心が低い傾向にあるなどの障がい種別による視聴意識の違いや、視聴に積極的な人と消極的な人の二極化傾向を示唆している。これらの論考が共有するのは、一言で「障がい者」と括らず、個人々の生活環境や状態を踏まえて分析することで、パラリンピック放送に対して多様な捉え方がみえてくるという視点である。

本論考は、上述の共同調査に関する一連の報告に連なるものであり、当該調査の結果に関してこれまで十分に分析されていなかった、健常者のパラリンピックに対する視聴状況および視聴による意識の変化について検討することを目的としている。制度上パラリンピックへの出場資格を有さず、障がい者以上にパラリンピックを「自分事」として捉えることの困難性を抱えていると推察される健常者が、パラリンピック放送をどのように捉え、それが障がい者や障がいに対する意識の変化にどのように繋がっているのかを分析することは、これまで検討してきた障がい者の視聴意識と合わせて、パラリンピック放送が「インクルーシブな社会を創出する」ためにいかに機能しうるのかを考える上で、重要な基礎的知見を提供しうるものといえる。

2. 調査概要および分析方法

日本財団パラリンピックサポートセンター・NHK 放送文化研究所共同研究「パラリンピックと放送に関する研究」の調査結果について、健常者のテレビ視聴状況や意識の変化に着目した二次分析を行う。当該調査は、調査会社ジーエフケー・インサイト・ジャパンが所有するアンケートモニターのうち、身体障がい・知的障がい・精神障がいの18歳以上の障がい者1,375名（うち知的障がい者100名については家族による代理回答）、18歳未満の障がい児400名（家族による代理回答）、18歳以上の健常者500名を対象としたWeb アンケート調査であり、平昌パラ大会閉会式翌々日からの7日間、2018年3月20日（火）～26日（月）の期間に実施されたものである。調査項目は基本的属性に加え、「放送視聴状況に関する項目」「放送に対する意識・態度についての項目」「放送視聴による変化についての項目」などから構成されている。調査にあたっては、委託先であるジーエフケー・インサイト・ジャパンの社内規定に準じ、個人情報に関する適切な運用、問い合わせ窓口の設置など、調査対象者に不利益が生じぬよう倫理的な配慮を行っている。

先述したように、本論考では調査結果のうち、特に健常者500名（表1）の回答結果に着目して分析を行う。第一に、健常者の視聴状況に関する傾向として、平昌パラ大会にどの程度関心を持ち（「関心度」）、どの程度積極的に視聴していたのか（「視聴積極度」）について、障がい者の結果と比較しながら検討するとともに、どのような属性が「視聴積極度」と関連しているのかについて分析していく。第二に、健常者が平昌パラ大会の放送をどのような目線で見ていたのかについて、放送を「見た理由」と「見なかった理由」に着目して分析する。第三に、平昌パラ大会放送の視聴が、健常者の障がい者や障がいに対する意識にどのように作用しているのかについて分析を行う。ここでは意識に対する作用がみられた人が、具体的にどのような人であったのかについて「視聴積極度」「見た理由」との関連を分析していく。第四に、平昌パラ大会の放送が健常者に対してどのような印象を与えたのかについて、自由回答のテキストデータに基づき具体的に読み解くことを試みる。ここでは計量的なテキスト分析による全体傾向の把握に加え、特に「視聴積極度」が高かった回答者の放送に対する印象を抽出して分析していく。

表1 サンプル構成

男性					女性					合計
18～29歳	30代	40代	50代	60代	18～29歳	30代	40代	50代	60代	
50名	50名	50名	50名	50名	50名	50名	50名	50名	50名	500名

3. 分析結果および考察

1) 平昌パラ大会放送の視聴状況について

(1) 「関心度」

はじめに、平昌パラ大会に対する「関心度」として、「あなたご自身は、今年開催されたピョンチャンパラリンピックについて、どの程度関心がありますか。あなたご自身の現在のお気持ちに近いものをお答え下さい」^{註2}という質問を行った。本項目に対する健常者と障がい者それぞれの回答結果を示したものが表2である（有効回答数：健常者500件、障がい者1,275件）。なお、本稿で比較対象として用いる障がい者の回答結果は、知的障がい者および18歳未満の障がい者の家族による代理回答を除き、18歳以上の障がい者本人によるもの限定している。健常者の結果をみると、「まったく関心がない」という回答が最も多く26.4%、以下「どちらともいえない」が26.2%、「まあ関心がある」が22.1%、「あまり関心がない」が19.0%、「大変関心がある」が6.2%であった。健常者の全体傾向として、平昌パラ大会に対して関心がある層よりも、ない層の方が多く示された。

また、障がいの有無によって回答に有意な差があることが認められ、健常者の方が障がい者より、平昌パラ大会に対して「関心度」が低かったことが示された。健常者の回答結果については、「大変関心がある」「まあ関心がある」を合計した「関心あり層」(28.3%)が、「あまり関心がない」「まったく関心がない」を合計した「関心なし層」(45.4%)を大きく下回っていた。

表2 「関心度」と障がいの有無

SA

	①大変 関心がある	②まあ 関心がある	③どちらとも いえない	④あまり 関心がない	⑤まったく 関心がない	関心あり層 (①+②)	関心なし層 (④+⑤)
健常者 (N=500)	6.2%	22.1%	26.2%	19.0%	26.4%	28.3%	45.4%
障がい者 (N=1,275)	11.0%	25.2%	25.0%	16.8%	21.9%	36.2%	38.7%

p<.01

(2) 「視聴積極度」

次に、平昌パラ大会のテレビ放送に対する「視聴積極度」として、テレビで平昌パラ大会を視聴した人（有効回答数：健常者307件、障がい者864件）に対し「あなたご自身

は、ピョンチャンパラリンピックのテレビ放送について、どの程度積極的に見ていましたか」という質問を行った。本項目に対する健常者と障がい者それぞれの回答結果を示したものが表3である。健常者の結果をみると、「積極的というほどでもないが、興味のあるものは見ていた」という回答がもっとも多く39.8%、以下「たまたまやっていたら見るのがあった」が38.5%、「興味がなく、ほとんど見ていなかった」が13.4%、「積極的に見ていた」が8.3%であった。

また、「関心度」と同様に、障がいの有無によって回答に有意な差があることが認められた。回答結果を詳細にみると、特に「積極的に見ていた」（健常者8.3%、障がい者17.8%）という回答は、健常者が障がい者の約半分の割合となっており、逆に「積極的というほどではないが、興味のあるものは見ていた」（健常者39.8%、障がい者35.3%）、「たまたまやっていたら見るのがあった」（健常者38.5%、障がい者31.4%）という回答の割合は、健常者の方が障害者よりも高い結果となっている。健常者は障がい者と比較して平昌パラ大会の視聴に対する積極性が薄く、興味がある部分を選択的に視聴していた、あるいは「なんとなく」視聴していたといった人が多い傾向にあったといえる。ただし、「興味がなくほとんど見ていなかった」（健常者13.4%、障がい者15.6%）という回答の割合は、健常者の方がやや障がい者よりも低い。

表3 「視聴積極度」と障がいの有無

SA

	①積極的に見ていた	②積極的というほどではないが、興味のあるものは見ていた	③たまたまやっていたら見るのがあった	④興味はなく、ほとんど見ていなかった	⑤わからない
健常者 (n=307)	8.3%	39.8%	38.5%	13.4%	0.0%
障がい者 (n=864)	17.8%	35.3%	31.4%	15.6%	0.0%

p<.001

(3) 個人的属性と「視聴積極度」

次に、健常者のうち、どのような属性の人が平昌パラ大会を積極的に視聴していたのかを検討するため、年代、性別、スポーツ活動頻度、障がい者との接点の有無の4つの属性と「視聴積極度」の関連性について分析していく。

まず、年代と「視聴積極度」の関連性についての分析結果を示したものが表4である。年代の違いによる有意な差は認められず、総じて「積極的というほどではないが、興味のあるものは見ていた」「たまたまやっていたら見るのがあった」と回答した人の割合が多い傾向にあった。ただし、18歳～29歳では「たまたまやっていたら見るのがあ

た」と回答した割合が51.0%と半数を超え、また60代では「積極的というほどではないが、興味のあるものは見ていた」と回答した割合が59.2%と半数を超えるなど、個別の回答結果をより詳細に比較すると、年代による傾向の違いもみられた。

表4 「視聴積極度」と年代

SA

	①積極的に見ていた	②積極的というほどではないが、興味のあるものは見ていた	③たまたまやっていたら見るこがあった	④興味はなく、ほとんど見ていなかった	⑤わからない
18～29歳 (n = 49)	10.2%	24.5%	51.0%	14.3%	0.0%
30代 (n = 57)	12.3%	33.3%	36.8%	17.5%	0.0%
40代 (n = 65)	9.2%	35.4%	40.0%	15.4%	0.0%
50代 (n = 65)	7.7%	36.9%	40.0%	15.4%	0.0%
60代 (n = 71)	4.2%	59.2%	29.5%	7.0%	0.0%

n. s.

性別と「視聴積極度」の関連性についての分析結果を示したものが表5である。年代ごとの分析結果と同様、性別の違いによる有意な差は認められず、男女どちらも「積極的というほどではないが、興味のあるものは見ていた」「たまたまやっていたら見るこがあった」と回答した人の割合が多い傾向にあった。

表5 「視聴積極度」と性別

SA

	①積極的に見ていた	②積極的というほどではないが、興味のあるものは見ていた	③たまたまやっていたら見るこがあった	④興味はなく、ほとんど見ていなかった	⑤わからない
男性 (n = 152)	9.9%	38.2%	38.2%	13.8%	0.0%
女性 (n = 155)	7.1%	40.0%	39.4%	13.5%	0.0%

n. s.

スポーツ活動頻度と「視聴積極度」についての分析結果を示したものが表6である。スポーツ活動頻度の違いによって有意な差が認められ、より多くスポーツ活動を行っている人の方が、より積極的に平昌パラ大会を視聴していた傾向にあることが示唆された。

表6 「視聴積極度」とスポーツ活動頻度

SA

	①積極的に 見ていた	②積極的という ほどではない が、興味のある ものは見ていた	③たまたま やっていたら見 ることがあった	④興味はなく、 ほとんど見て いなかった	⑤わからない
【スポーツ活動】 日常的に行っている (n=75)	17.3%	45.3%	25.3%	12.0%	0.0%
【スポーツ活動】 たまに行っている (n=74)	8.1%	39.2%	39.2%	13.5%	0.0%
【スポーツ活動】 ほとんど行っていない (n=69)	7.2%	43.5%	36.2%	13.0%	0.0%
【スポーツ活動】 まったく行っていない (n=89)	2.2%	30.3%	51.7%	15.7%	0.0%

p<.01

障がい者との接点の有無と「視聴積極度」についての分析結果を示したものが表7である。なお、障がい者との接点については、「視聴積極度」の有効回答数307件のうち、障がい者が「家族にいた・いる」(32名)「友人・知人にいた・いる」(60名)と回答した人92名を「接点あり」、 「身近にいたことはない」と回答した人182名を「接点なし」と分類して分析している。結果をみると、障がい者との接点の有無による有意な差が認められ、接点がある人の方が、ない人よりも、より積極的に平昌パラ大会を視聴していた傾向にあることが示唆された。

表7 「視聴積極度」と障がい者との接点

SA

	①積極的に 見ていた	②積極的という ほどではない が、興味のある ものは見ていた	③たまたま やっていたら見 ることがあった	④興味はなく、 ほとんど見て いなかった	⑤わからない
【障がい者との接点】 あり (n=92)	18.5%	39.1%	30.4%	12.0%	0.0%
【障がい者との接点】 なし (n=182)	5.5%	41.2%	39.6%	13.7%	0.0%

p<.001

以上のように、健常者の平昌パラ大会放送の視聴状況を概観すると、「関心度」「視聴積極度」ともに障がい者に比べて低い傾向にあり、「なんとなく」大会を視聴していた

人が多かったものとみられる。そのなかで、個人的属性を踏まえた状況を見ると、日常的なスポーツ活動頻度が高い人や、家族や友人・知人関係で障がい者との接点がある人については、相対的にみると積極的に視聴していた傾向にあった。スポーツそのものへの関心や、日常生活における障がい者との関係性が、パラリンピックを積極的に視聴することに対してポジティブに作用している可能性が示唆された。

2) 平昌パラ大会放送への目線について

視聴状況の全体傾向を踏まえ、以下では、健常者が平昌パラ大会を「見た理由」「見なかった理由」についての分析をもとに、平昌パラ大会が健常者にどのような目線で見られていたのかについて検討していく。分析にあたっては、冒頭で論じたパラリンピックに関するメディア報道の活況という社会的背景や、視聴傾向においてスポーツへの関心や障がい者との関係性が視聴積極度に関与している可能性が示唆された点を踏まえ、「見た理由」「見なかった理由」に関する質問項目を、話題性に関連する「外部要因」、スポーツそのものへの注目に関連する「スポーツ要因」、障がいやパラスポーツ固有の要素に関連する「パラスポーツの固有要因」という3つのカテゴリーに分けて分析していく（表8）

表8 平昌パラ大会放送への目線に関する項目のカテゴリー

見た理由		
外部要因	スポーツ要因	パラスポーツの固有要因
周囲の人やSNS等で薦められた 2020年に東京大会がある オリンピックが盛り上がっていた ニュースや記事で話題になっていた	競技の詳しいルールを知って興味を持った 好きな/注目している選手がいる 好きな競技がある アスリートが活躍する姿を見たい スポーツとして見るのが楽しい 日本人選手が活躍した	障がいがある人に対する理解が深まると思った 障がい者スポーツに興味がある 障がい者に関わるボランティアに興味がある 障がい者が努力する姿を見たい
見なかった理由		
外部要因	スポーツ要因	パラスポーツの固有要因
周囲の人やSNS等で薦められなかった ニュースや記事で話題になっていない 競技・ルールや選手について知る機会がない	日本人選手が活躍しなかった オリンピックも見えていなかった 普段からスポーツは観ない 見たい競技がない どんな選手がいるか知らない	障がい者が努力する姿によって、自分も頑張ることを求められる 周りに障がいがある人がいない パラリンピックはスポーツとして面白くない パラリンピック選手は、自分とは遠い存在だ 障がい者がスポーツをする姿を見るのがつらい 障がい者スポーツに興味がない

なお、「見た理由」については、平昌パラ大会の「視聴時間」（健常者の有効回答数307件）について「ほぼ毎日3時間以上見ていた」（9名）、「ほぼ毎日見るが3時間未満」（83名）、「週に3～4日」（48名）、「週に1～2回」（35名）のいずれかいずれかに回答した健常者175名に質問し、「見なかった理由」については、平昌パラ大会の「視聴時間」について「期間中数回程度」（73名）、「ほとんど・まったく見聞きしなかった」（59名）のいずれかに回答した健常者132名に質問して得た結果に基づいている。「見た理由」「見なかった理由」ともに、複数回答可の選択肢にて回答を得た。

(1) 「見た理由」

平昌パラ大会を「見た理由」の回答結果について、「外部要因」「スポーツ要因」「パラスポーツの固有要因」という3つのカテゴリごとにまとめて結果を示したものが、図1である。

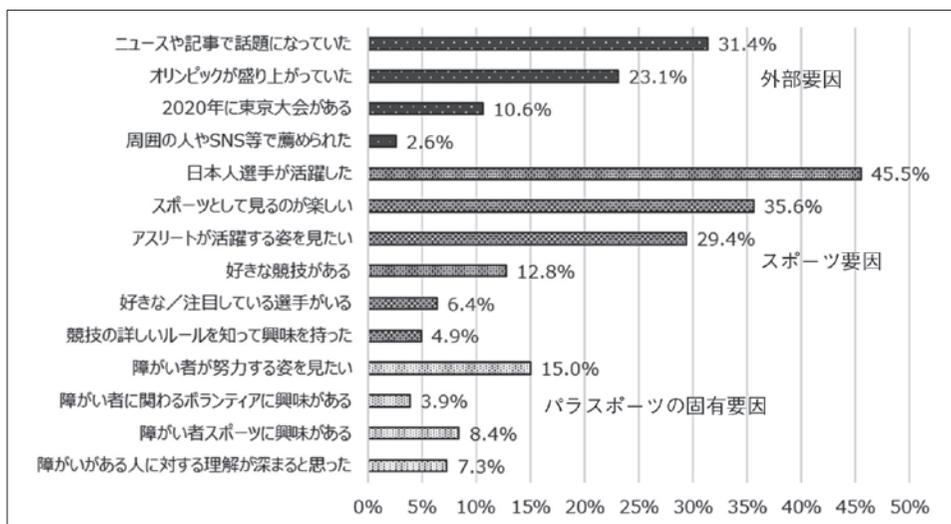


図1 健常者が平昌パラ大会を「見た理由」(n=175)

「日本人選手が活躍した」(45.5%)、「スポーツとして見るのが楽しい」(35.6%)など、「スポーツ要因」に関する項目が見た理由の上位に挙がっていることが分かる。次いで、「ニュースや記事で話題になっていた」(31.4%)、「オリンピックが盛り上がっていた」(23.1%)など、「外部要因」に関する項目がみられ、「障がい者が努力する姿を見たい」(15.0%)など、「パラスポーツの固有要因」に関する項目は、比較的下位に位置づいていた。平昌パラ大会を視聴した人は、特に日本人が活躍しているかどうか、スポーツとして面白いかどうかといった点において、他の国際的なスポーツ・イベントにおいても共通すると思われる眼差しでパラリンピックを見ていた傾向にあるものと考えられる。また、ニュースでの話題性など、オリンピック・パラリンピックという一連のイベントとしての盛り上がりの中に位置づいていることが、大会を見る動機づけに一定程度寄与していたといえる。これらの要因と比べると、「障がい者のスポーツだから」特別に視聴しているという目線は、相対的に低い傾向にあったものと思われる。

(2) 「見なかった理由」

平昌パラ大会を「見なかった理由」の回答結果について、「外部要因」「スポーツ要因」

「パラスポーツの固有要因」という3つのカテゴリーごとにまとめて結果を示したものが、図2である。

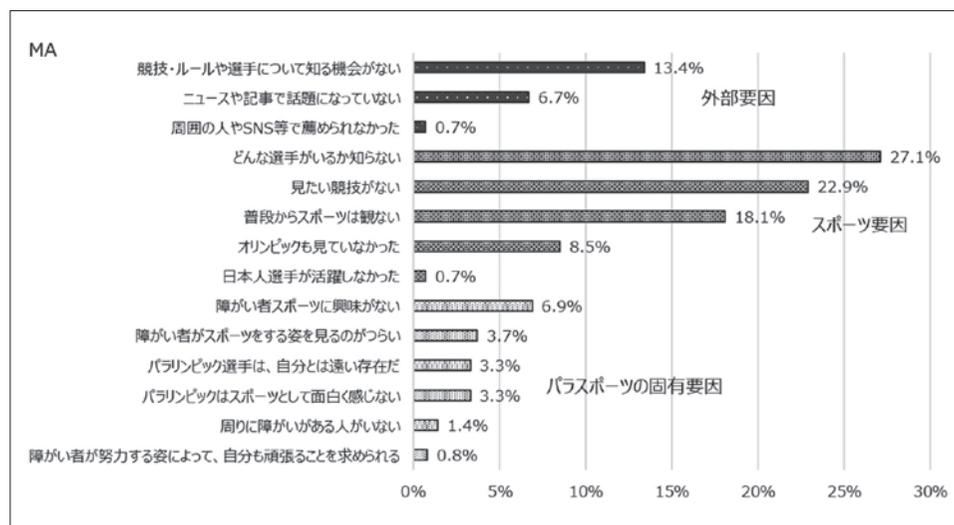


図2 健常者が平昌パラ大会を「見なかった理由」(n=132)

結果をみると、「見た理由」と同様に、「どんな選手がいるか知らない」(27.1%)、「見たい競技がない」(22.9%)、「普段からスポーツは観ない」(18.1%)などの「スポーツ要因」が上位を占め、次いで「競技・ルールや選手について知る機会がない」(13.4%)、「ニュースや記事で話題になっていない」(6.7%)などの「外部要因」が中位にみられた。「パラスポーツの固有要因」については、「障がい者スポーツに興味がない」(6.9%)が話題性と同程度の割合でみられ、その他の項目は相対的に下位に位置していた。平昌パラ大会をあまり視聴しなかった人は「障がい者のスポーツだから」見ていないというよりも、他のスポーツ・イベントなどにも共通するスポーツへの理解や関心そのものが、見るという行為を動機づける水準に達していなかった傾向にあるといえる。

以上のように、健常者の平昌パラ大会放送への目線については、「障がい者のスポーツ」という特別な眼差しよりも、単純にスポーツとして面白いかどうかという眼差しが向けられている傾向が強いことが示唆された。この点を踏まえれば、パラリンピック放送の、障がい者や障がいに対する意識変革という社会的課題に対する作用は、それ自体が目的として達成されるというよりも、まずスポーツとしての面白さを多くの人に伝える先に、結果として生じるものであるという観点が重要になるものと考えられる。

3) 平昌パラ大会放送の視聴による意識の変化について

これまで、健常者の平昌パラ大会放送の視聴状況や放送に対する目線について検討してきた。その結果を踏まえ、以下では、平昌パラ大会放送視聴による、パラスポーツあるいは障がい者や障がいについての健常者の意識に対する作用を分析する。

(1) 「平昌パラ大会放送の影響」の全体傾向

平昌パラ大会放送の影響として、「ピョンチャンパラリンピックに関する放送は、あなたご自身のお気持ちにどのような影響がありましたか。あなたご自身のお気持ちに近いものをお答え下さい」という質問を行い、12項目に対して「大変そう思う」「まあそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」「わからない」の6件法で回答を得た（有効回答数：健常者500件、障がい者1,275件）。全12項目のうち、健常者と障がい者に共通して質問した8項目について「大変そう思う」「まあそう思う」と回答した人を合計した割合を析出し、健常者と障がい者の結果を比較したものを表9に示す。色付きで示した項目で、障がいの有無による有意差が見られた。

表9 「平昌パラ大会放送の影響」と障がいの有無

MA

	①アスリートの姿を見て前向きな気分になった	②障がい者スポーツをもっと見たくなくなった**	③障がい者に関する報道の仕方や伝え方が十分ではないと感じた**	④障がいについての理解が進んだ/見方が変わった	⑤メディアは障がい者を特別扱いしているように感じた**	⑥自分もスポーツをもっとやりたくなった*	⑦障がい者のキャスター・リポーター・解説者等がいて親しみが持てた	⑧パラリンピックは堅苦しさを感じたり、構えて見てしまうことがあった**	⑨障がいがある人との接し方の理解に役立った ※健常者のみの質問項目
健常者 N=500	34.6%	24.7%	17.7%	24.4%	13.8%	16.2%	17.8%	11.2%	18.4%
障がい者 N=1,275	37.9%	31.1%	30.2%	26.1%	22.1%	20.6%	20.0%	19.0%	-

* : p<.05, ** : p<.01

健常者の結果について、項目間で比較すると、「①アスリートの姿を見て前向きな気分になった」(34.6%)、「②障がい者スポーツをもっと見たくなくなった」(24.7%)などの回答の割合が、相対的に高かった。例えば、「⑨障がいがある人との接し方の理解に役立った」(18.4%)など、障がい者や障がいに対する直接的な意識の変化よりも、アスリートを見ることによる気分の高まりや、競技への興味など、パラスポーツ自体に対する意識の変化の方が、相対的に大きく生じているものと推察できる。

障がいの有無による有意差がみられた項目をみると、例えば、「②障がい者スポーツをもっと見たくなくなった」(健常者24.7%、障がい者31.1%)、「⑥自分ももっとスポーツを

やりたくなった」(健常者16.2%, 障がい者20.6%)など, パラスポーツの観戦や自身のスポーツ活動に対する意識変化の項目において差がみられ, 健常者は障がい者と比べ, パラリンピックの放送を自身のスポーツとの関わりに直接結びつけて捉える意識が低い傾向が示唆された。

また, 「③障がい者に関する報道の仕方や伝え方が十分でないと感じた」(健常者17.7%, 障がい者30.2%), 「⑤メディアは障がい者を特別扱いしているように感じた」(健常者13.8%, 障がい者22.1%)など, パラスポーツや障がい者をメディアがどのように扱うべきかについての意識にも差がみられている。具体的には, 健常者の方が障がい者よりも, 障がい者に関する報道のあり方に不十分さを感じておらず, 障がい者を特別扱いしているとも感じていない傾向がみられるなど, 既存の報道のあり方を問題視する姿勢があまりない可能性が示唆されている。さらに, 「⑧パラリンピックは堅苦しさを感じたり, 構えて見てしまうことがあった」(健常者11.2%, 障がい者19.0%)など, 放送を受容する態度面においても差がみられ, 健常者の方が障がい者よりも, ある意味「気楽」な姿勢で平昌パラ大会を視聴していた可能性も示唆された。

これらの結果は, 障がいの有無によるパラリンピック放送の見方や影響の違いについて示唆的な観点を提示している。しかし, 前提となる視聴状況が障がいの有無によって異なり, 健常者で平昌パラ大会を積極的に視聴した人が8.3%であったことなどを踏まえれば, 上述の結果のみでパラ放送の作用を単純に評価することは難しい。そこで, 以下では, 視聴状況や見方の違いが, パラ放送の作用にどのように関連しているのかについて分析を行う。ここでは特に, 健常者による障がい者や障がいに対する意識の変化に関わる項目に着目して検討する。

(2) 「視聴積極度」および「見た理由」と意識変化の関連性

まず, 健常者について「障がいについての理解が進んだ／見方が変わった」の項目に「大変そう思う」「まあそう思う」と回答した人を「理解が進んだ群」, 「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」と回答した人を「理解が進まなかった群」とし, 「視聴積極度」との関連を分析した結果を図3に示す。「視聴積極度」と「障害についての理解が進んだ／見方が変わった」かどうかについて有意な関連性が認められ, 平昌パラ大会を積極的に視聴した人ほど, より障がいについての理解が進んだと感じている傾向が示された。

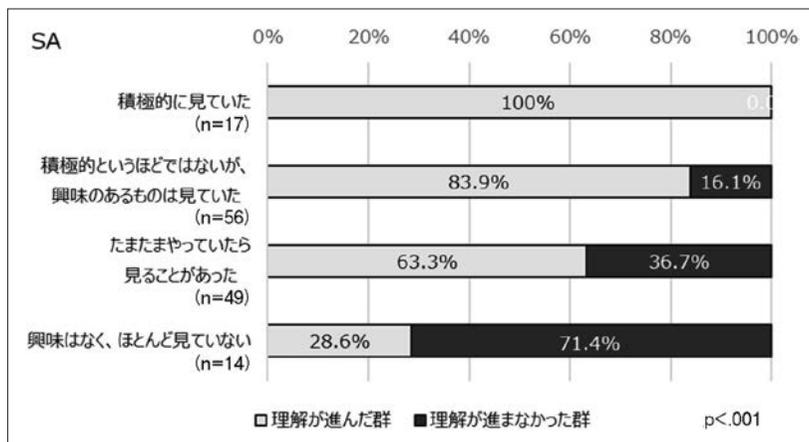


図3 放送を通じた障がい（者）理解と「視聴積極度」

また、同様に、健常者について「障害がある人との接し方の理解に役立った」の項目に「大変そう思う」「まあそう思う」と回答した人を「役立った群」、 「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」と回答した人を「役立たなかった群」として、「視聴積極度」との関連を分析した結果を図4に示す。「障害がある人との接し方の理解に役立った」かどうかについても「視聴積極度」との有意な関連性が認められ、平昌パラ大会を積極的に視聴した人ほど、放送が障がいのある人との接し方の理解に役立ったと感じている傾向が示された。

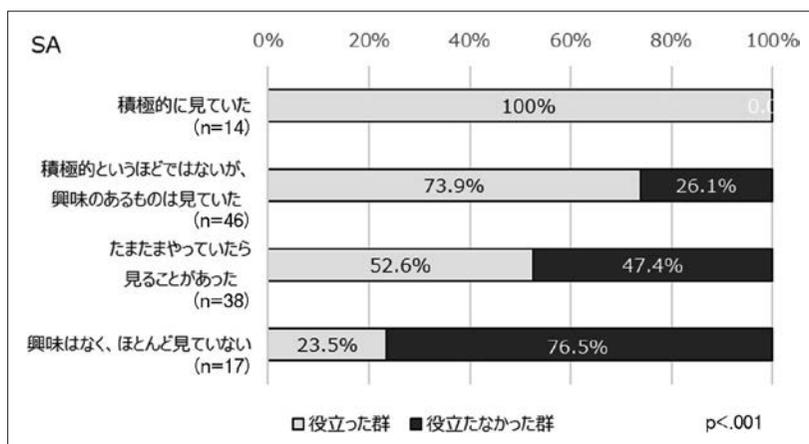


図4 放送を通じた障がい者との接し方の理解と「視聴積極度」

次に、パラリンピック放送への目線として先に分析した「外部要因」「スポーツ要因」「パラスポーツの固有要因」の3つのカテゴリーの中で、それぞれ最も割合の高かった

「ニュースや記事で話題になっていた」「日本人選手が活躍した」「障がい者が努力する姿を見たい」という3つの「見た理由」が、それぞれ「障害についての理解が進んだ／見方が変わった」「障害がある人との接し方の理解に役立った」という変化とどのように関係しているかについて、上記と同様の「理解が進んだ群」「理解が進まなかった群」および「役立った群」「役立たなかった群」との関連を分析した結果を図5、6に示す。

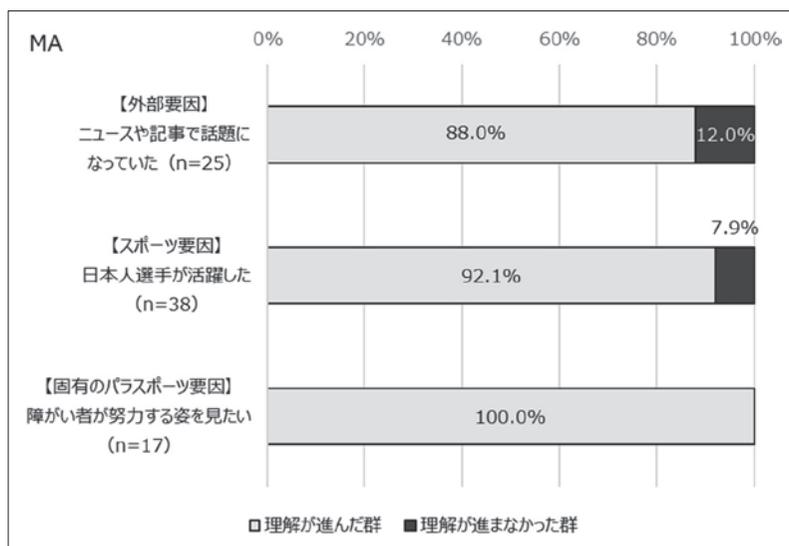


図5 放送を通じた障がい（者）理解と「見た理由」

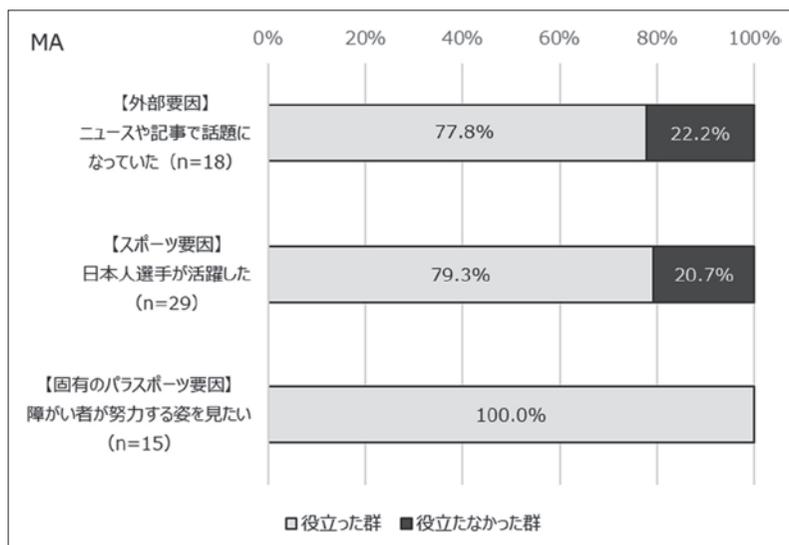


図6 放送を通じた障がい者との接し方の理解と「見た理由」

結果をみると、特に「パラスポーツ固有の要因」を「見た理由」とした人は、「障がいについての理解が進んだ／見方が変わった」「障がいがある人との接し方の理解に役立った」という2つの意識変化について、どちらも100%変化を感じていることが分かる。「パラスポーツ固有の要因」は「見た理由」としては少数派であるものの、特に「障がい者のスポーツだから着目してみる」という視点が、障がい者や障がいの理解に繋がっている可能性が示唆された。しかしながら、「外部要因」「スポーツ要因」を「見た理由」とした人についても、総じて7割以上の人が、意識の変化を感じていた。たとえパラリンピックを見るきっかけが、話題性や選手の活躍であったとしても、パラリンピック放送の視聴は、結果として障がい者や障がいの理解にポジティブに働く可能性があることを指摘できる。

4) 平昌パラ大会視聴に関する具体的な印象について

最後に、「ピオンチャンパラリンピックに関する放送を実際に見ることによって、あなたはどのようなことを感じたり、お考えになりましたか。どんなことでも結構ですので、具体的にお教えてください」という質問で得た自由回答のテキスト分析から、健常者が平昌パラ大会の視聴から抱いた具体的な印象について、より詳細に分析していくこととする。分析にあたっては、計量テキスト分析ソフト「KH Corder」を用い、樋口(2014)²²が示した方法論に準じる。

(1) 平昌パラ大会の印象に関する傾向

はじめに、健常者から得た自由回答全500件を対象に、頻出単語の分析、および頻出単語同士の結びつきの強さを可視化する共起ネットワーク分析を行い、平昌パラ大会の放送が健常者に対して具体的にどのような印象を与えたのかについての全体傾向を検討していく。

まず、回答結果における頻出単語上位30語を示したものが表10である。「ない」(165回)、「特に」(102回)、「なし」(83回)など、特に回答がないことを記したと思われる単語が最上位に位置していた。さらに、「競技」(26回)、「選手」(25回)、「活躍」(13回)など、選手の印象に関する記述と思われる単語や「感動」(32回)、「努力」(17回)、「前向き」(13回)、「勇気」(10回)など、パラリンピックの価値に言及していると思われる単語が頻出している傾向がみられた。また、「オリンピック」(30回)が「パラリンピック」(24回)よりも頻出している点も示唆的である。オリンピックと照らし合わせて印象を記述する内容がみられるものと思われる。

次に、共起ネットワーク分析の結果を図7に示す。円の大きさは語の頻出量を表し、

表10 健常者の自由回答 頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
ない	165	スポーツ	29	放送	19
特に	102	感じる	27	努力	17
見る	94	競技	26	持つ	14
なし	83	興味	25	活躍	13
思う	68	選手	25	前向き	13
障害	61	パラリンピック	24	比べる	10
いない	55	姿	23	勇気	10
頑張る	46	自分	22	関心	8
感動	32	健常	20	素晴らしい	8
オリンピック	30	人	19	多い	8

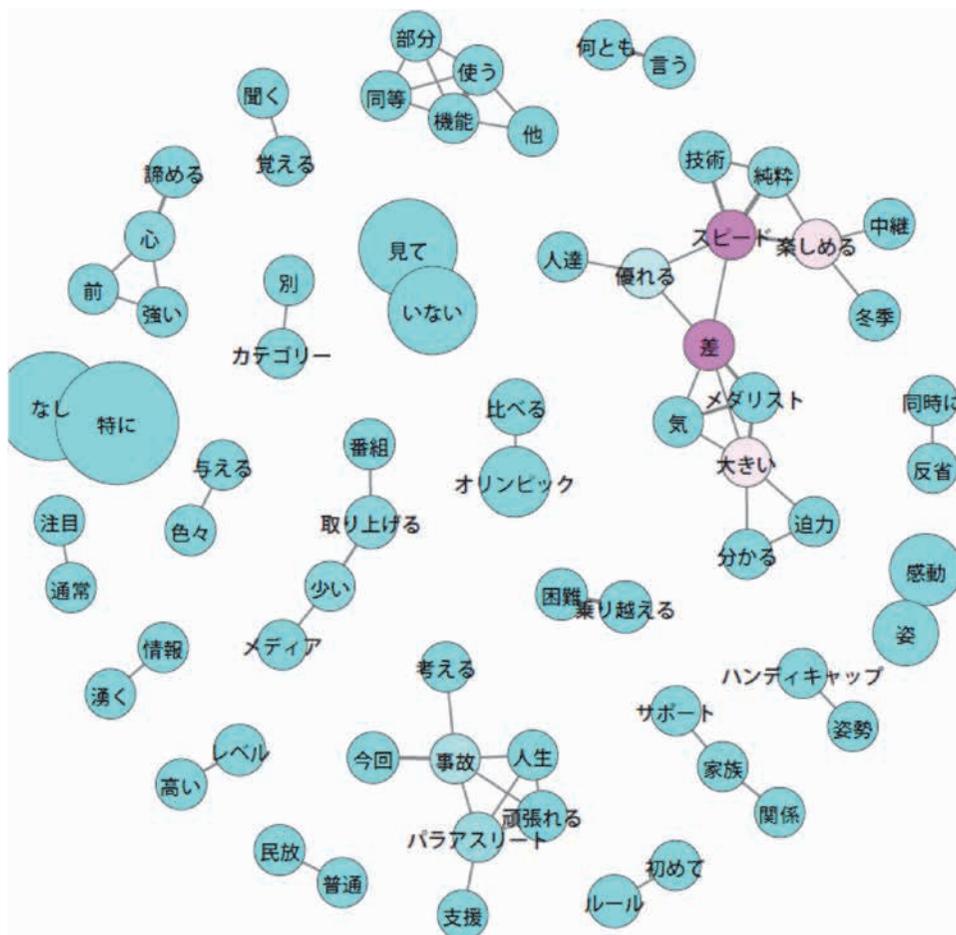


図7 健常者の自由回答 共起ネットワーク

線の太さが共起関係（出現パターンの類似性）の強さを表している。また、円の色は語の中心性を表しており、ネットワーク構造の中でピンクの円は最も中心的な役割を果たしていると判定された語である（次いで、白、水色の順）²³。分析の結果、「スピード」「差」「楽しめる」「技術」「優れる」「メダリスト」などの、競技内容や結果の印象に言及したと思われる語のまとまりや、「パラアスリート」「事故」「人生」「頑張れる」など選手のストーリー性に関して言及したと思われる語のまとまり、「諦める」「心」「強い」や「感動」「姿」など、パラリンピックの精神や選手の姿勢に言及したと思われる語のまとまり、「メディア」「取り上げる」「少い」など、メディア報道の扱い方に言及した語のまとまりなどがみられた。「オリンピック」は「比べる」と結びついており、パラリンピックとオリンピックを比べた記述があることを示唆している。

以上のように、計量的な分析によって健常者の自由回答に関する全体傾向を概観すると、特に選手の活躍に関する印象の記述や、パラリンピックの精神、選手の姿勢やストーリー性に関する印象の記述、パラリンピックとオリンピックを照らし合わせた印象の記述などが多くみられる可能性を指摘できる。これらの全体傾向を踏まえて、以下ではさらに平昌パラ大会の放送が健常者に与えた影響を詳細に検討するために、放送による意識の変化がみられ、より詳細な記述が期待できるという観点から、「視聴積極度」において「積極的に見ていた」と答えた人の回答を分析していく。

(2) 積極的な視聴者の抱いた印象

「視聴積極度」において「積極的に見ていた」と回答した人26名の自由記述をすべて抽出し、共起ネットワーク分析を行った結果を図8に示す。結果をみると「成田」「新田」「村岡」などの、具体的な選手の個人名に言及した語のまとまり、「それぞれ」「人生」「事故」「頑張れる」などの、選手のストーリー性に着目した語のまとまり、「使える」「機能」「最大限」「使う」などの、パラリンピックの精神に言及したと思われる語のまとまりなどがみられた。全体傾向と同様、積極的に視聴した人についても、視聴を通じて選手の活躍、ストーリー性、パラリンピックの精神などに強い印象を受けていることが推察される。

「見た理由」において日本人選手の活躍という要因が最も高かったという結果（図1）に対して、本分析結果を照らし合わせれば、実際に積極的に視聴した人の印象においても、選手の活躍が強い印象を与えていたとみられる。また、選手のストーリー性が強い印象を与えているという点は、パラリンピックの放送がどのような点において、受け手の感動を喚起しているのかについて、示唆的な結果である。単に選手が活躍する姿のみでなく、それに付随する選手固有のストーリー性が、特に強い印象として視聴者に受け

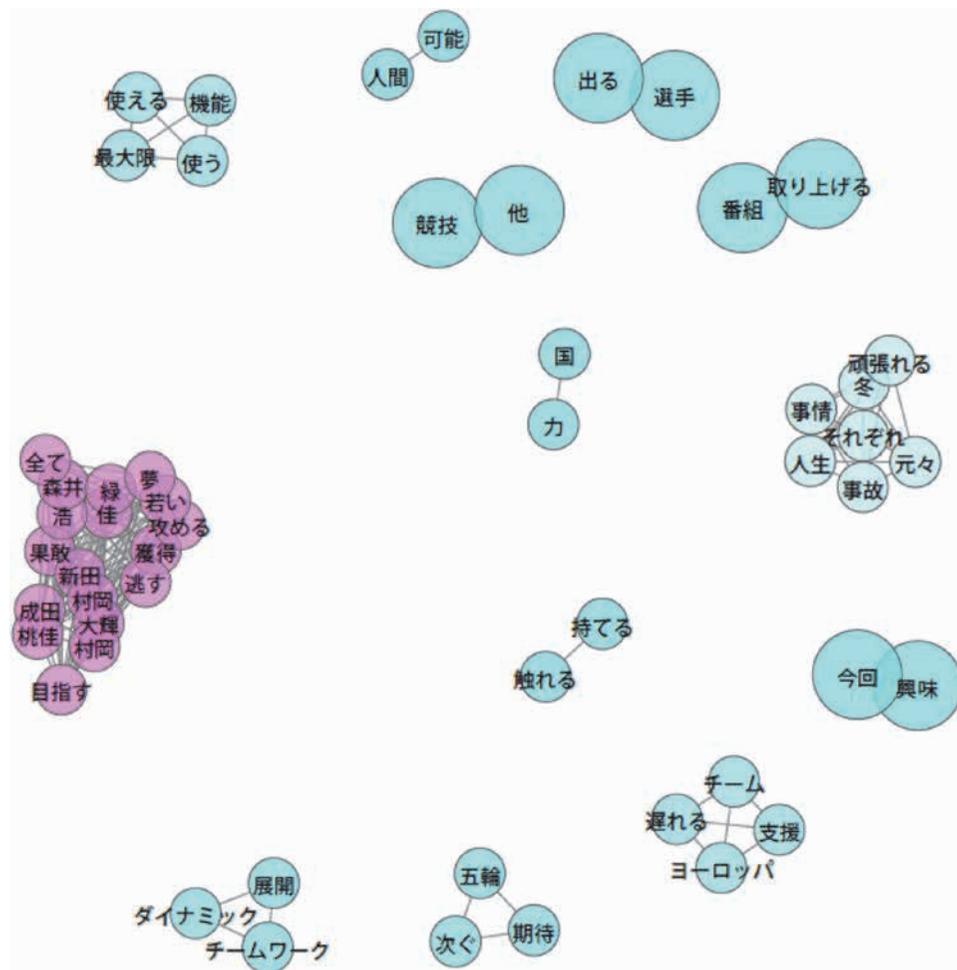


図8 「積極的に見ていた」人の自由回答 共起ネットワーク

止められているものと推察される。

感動を喚起するストーリー性についてより詳細に把握するため、26件の回答のうち、選手のストーリー性に関連した内容に言及したと思われる回答結果を以下に抜粋し内容を検討する。

- ・ダイナミックな展開やチームワーク、かつてはオリンピックに出ていた選手を見てどんなこともできると感じた。(18~29歳男性)
- ・気持ちがしっかりしていれば困難なことも乗り越えられる。(30代男性)
- ・障害があっても他の使える機能を最大限に使って競技に取り組んでいる姿に感動した。(40代男性)

- ・障害を持っていて普通の生活だけでも大変だと思いますが、スポーツまで一生懸命にやられる姿にとっても感動を受けました。(40代女性)
- ・今まで冬は見たことがなかったが、今回とても面白いと思ったし、障害があるのにここまで頑張れる方たちを見て励みになった。元々障害があったのか、事故などで障害を持ったのか、人それぞれ事情が違う、そんな中で頑張れる、そんなパラアスリートたちの人生に興味を持った。(40代女性)

記述内容をみると、特に「困難の乗り越え」というストーリー性が、感動を喚起させる一つのポイントとなっていることを読み解くことができよう。上述した記述はあくまで「積極的に視聴した」人による選手のストーリー性への言及のみに限定して抽出しているため、このポイントのみでパラリンピック放送が与える感動について詳細に議論することは難しい。しかしながら、放送の視聴によって障がい者や障がいに対する意識の変化が特に強く見られた健常者の視聴者層が、特にどのような点に感動していた傾向にあるのかの一側面を示しているという意味で、示唆的な結果であるといえる。

4. まとめと課題

本研究の結果、平昌パラ大会の放送に対する健常者の視聴状況や解釈として、主に以下の知見が得られた。

①平昌パラ大会放送の視聴状況について

- ・「関心度」「視聴積極度」ともに障がい者に比べて低い傾向にあり、「なんとなく」大会を視聴していた人が多い。
- ・スポーツそのものへの関心や、日常生活における障がい者との関係性などの個人的属性が、パラリンピックを積極的に視聴することに対してポジティブに作用している可能性がある。

②平昌パラ大会放送への目線について

- ・「障がい者のスポーツ」という特別な眼差しよりも、単純にスポーツとして面白いかどうかという眼差しで視聴されている傾向が強い。

③平昌パラ大会放送の視聴による意識の変化について

- ・障がい者や障がいに対する直接的な意識の変化よりも、アスリートを見ることによる気分の高まりや、競技への興味など、パラスポーツ自体に対する意識の変化の方が、相対的に大きく生じている。

- ・積極的に視聴した人ほど、障がい者や障がいに対する理解が進んだことを実感している傾向にある。
- ・特に「障がい者のスポーツだから着目してみる」という視点を持って視聴した人は、障がい者や障がいに対する理解が進んだと認識している傾向にある。但し、話題性や選手の活躍という魅力から視聴した人も、7割以上が障がい者や障がいに対する理解が進んだと実感している。

④平昌パラ大会視聴に関する具体的な印象について

- ・特に選手の活躍や、その背景にあるストーリー性が受け手に強い印象を与えている傾向にある。具体的には、「困難の乗り越え」というストーリー性が感動を喚起させる一つのポイントとなっている可能性がある。

パラリンピックを積極的に視聴することが、健常者の障がい者や障がいに対する理解に繋がる可能性がみられたことは、パラリンピック放送が社会の意識変革にどのように作用するのかに関して示唆的な結果である。しかしながら、健常者全体の傾向をみれば、パラリンピックに関心を持ち、積極的に視聴している人は、現段階では少数派であるとみられる。そこで、「なんとなく」視聴する傾向が強い健常者を、いかにして積極的な視聴者に昇華させていくかは、パラリンピックがスポーツとして面白いかどうかという眼差しで見られる傾向にあり、話題性や選手の活躍に着目して見た視聴者にも結果として障がい者や障がいに対する理解の進展がみられたという結果が、有用な示唆を与えてくれよう。その意味で、渡辺・中村（2017）²⁴がメディア分析に基づいて論じたように、まず報道を通じてパラリンピックのスポーツとしての面白さを伝え、その過程で社会課題に対しての議論を生成していくというプロセスの重要性は、受け手に対する分析の結果からも同様に指摘できるものである。しかしながら、藤田（2002）²⁵も指摘したように、スポーツとしての面白さを伝えるというアプローチが、「できる人」を称え評価することのみに回収されると、障がい（者）理解という点で逆機能を持ってしまう難しさもある。「困難を乗り越える」というストーリー性が感動を喚起させるというパラリンピック放送の特徴も、常にこの難しさと隣り合わせであるように思われる。勝利や相対的に優れた能力のみにフォーカスするのではなく、様々な個性から生み出される固有な身体の躍動そのものの魅力を生き生きと伝えていくという視点からパラリンピック放送のあり方を模索していくことが、結果として人々の意識を変革していくための重要な姿勢となるのではないだろうか。

本研究は、平昌パラ大会の直後に実施した調査の二次分析であるという性格上、放送を通じた受け手の意識変化について、あくまで「どう感じているか」のレベルでの検討

にとどまるが、受け手が放送を視聴して感じたことが、態度や行動のレベルにどう落とし込まれていくのかに関しては、縦断的な調査によって明らかにしていくべき検討課題といえよう。

注

注1) 本稿では日本障がい者スポーツ協会の定義に準じ、パラリンピック競技、およびそれ以外の所謂「障がい者スポーツ」の競技を総称した言葉として「パラスポーツ」の表記を用い²⁶、「パラリンピック競技大会への参加の有無に関わらず、障がいのあるアスリート全般」²⁷を指す言葉として「パラアスリート」の表記を用いている。

注2) 質問紙では、NHK放送文化研究所の表記方法に準じ、「ピョンチャン」のカタカナ表記を用いている。

参考引用文献

- 1 山崎貴史・石井克, 2019, 「障害者スポーツに関する新聞報道の変容: 競技間格差に着目して」, 『北海道大学大学院教育学研究院紀要』, 134, 117-130。
- 2 ヤマハ発動機スポーツ振興財団, 2017, 「テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査」, 『2016(平成28)年度 障害者スポーツの振興と強化に関する調査研究報告書: テレビ放送, 選手認知度, 大学による支援に着目して』, 13-29。
- 3 ヤマハ発動機スポーツ振興財団, 2018, 「障害者スポーツ関連のテレビコマーシャル実態調査」, 『2017(平成29)年度 障害者スポーツの振興と強化に関する調査研究: テレビCF, 大学の先進的取り組み, 地域現場の実態に注目して』, 10-16。
- 4 橋本政晴, 2002, 「メディアスポーツ研究の経緯」, 橋本純一編, 『現代メディアスポーツ論』, 25-48。
- 5 牧舞美・齊藤まゆみ・澤江幸則, 2015, 「日本におけるパラリンピック教育の方向性: プログラム内容の検討をもとに」, 『アダプテッド体育・スポーツ学研究』, 1(1), 30。
- 6 藤田紀昭, 2002, 「障害者スポーツとメディア」, 橋本純一編 『現代メディアスポーツ論』, 197-217。
- 7 渡正, 2007, 「障害者スポーツによる儀礼的関心の構築: 1970年代の『運動』とパラリンピックの表象」, 『千葉大学日本文化論叢』, 8, 106-93。
- 8 崎田嘉寛, 2015, 「東京パラリンピック大会(1964)に関するテレビ放送: NHKでテレビ放送された映像に着目して」, 『スポーツ史学研究』, 28, 71-83。
- 9 遠藤華英, 2017, 「リオデジャネイロ・パラリンピック大会に関する新聞報道の傾向分析と一考察」, 『日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会紀要』, 7, 31-40。
- 10 田中暢子, 2017, 「そこにいる『あたりまえの存在』とスポーツがある社会: 障害者がスポーツをする姿を見るときという経験を通して」, 『放送研究と調査2017年9月臨時増刊号パラリンピック研究』, 56-70。
- 11 渡辺誓司・中村美子, 2017, 「2016リオパラリンピック放送の日英比較: 共生社会への変革と放送の役割」, 『放送研究と調査2017年9月臨時増刊号パラリンピック研究』, 32-54。
- 12 崎田, 前掲書, 79。
- 13 田中, 前掲書。
- 14 渡辺・中村, 前掲書。
- 15 日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会, 「パラリンピックと放送に関する研究」, <http://para.tokyo/2018/08/post-30.html>, (2018年5月20日)
- 16 山田潔・大野敏明, 2018, 「パラリンピック放送に対する身体障害者の声: ピョンチャンパラ

Viewing Attitudes of Able-bodied Viewers of Broadcasts of the PyeongChang 2018 Paralympic Games: A Secondary Analysis of “Study of the Paralympics and Broadcasting,” A Joint Study by the Nippon Foundation Paralympic Support Center and NHK Broadcasting Culture Research Institute

NAKAYAMA Kenjiro

(Okinawa University)

Since most previous studies on media coverage of the Paralympics have been dedicated to analyzing newspaper articles, television broadcasts, and other news outlets and examining the content presented by them, there is a need for studies focusing on the interpretation of the content by people on the receiving side. In view of this need, the Nippon Foundation Paralympic Support Center conducted a joint survey with the NHK Broadcasting Culture Research Institute targeting viewers of television broadcasts of the PyeongChang 2018 Paralympic Games in an attempt to grasp their viewing behaviors and attitudes. Analyses of the survey have been focused on the viewing attitudes of people with disabilities. Based on the survey's findings, this study aims to consider the viewing behaviors of able-bodied viewers of Paralympic broadcasts and the changes in their attitudes resulting from the viewing experience. Of the survey's findings, the study focuses in particular on the responses from 500 able-bodied viewers concerning their level of interest, level of active viewing, reason for viewing, reason for not viewing, broadcast impact, and broadcast impression, among other aspects related to the PyeongChang Paralympics. The responses are compared with those of people with disabilities, and the differences in response tendencies are analyzed according to various individual attributes.

It is shown that regarding the viewing behaviors of able-bodied viewers of

television broadcasts of the PyeongChang Paralympics, their levels of interest and active viewing were both lower than those of people with disabilities; and there was a tendency for people who frequently engaged in sports activities or interacted with people with disabilities in everyday life to watch the broadcasts more actively. It is also shown that many of the viewers watched the Paralympics simply because they found it interesting as a sports event, and not especially because it was a disability sports event. As for changes in viewer attitudes, many active viewers tended to feel that their understanding of disabled people and disabilities had grown, and more than 70% of viewers who were attracted by the event's popularity or athletes' achievements also tended to feel that their understanding of disabled people and disabilities had grown. Regarding broadcast impression, athletes' achievements and stories in particular tended to have a strong impression on viewers. More specifically, it is suggested that stories that describe "overcoming difficulties" was one of the key elements that moved viewers emotionally.

Active viewing of Paralympic broadcasts by able-bodied people may lead to the development of further understanding of disabled people and disabilities among able-bodied people. In order for this to happen, it will be important to present sports in a way that focuses not simply on winning or on exceptional skills, but also on the athletes' diverse characteristics that create a unique physical dynamism, and to communicate how this makes the sports interesting. The outcome will be to generate discussions about social issues.